望洋荘便り

第１６号
平成１７年
３月発行

「南禅寺。忘れられた恩の話より」を読んで

社会福祉法人　りんさく福祉会
理事長　須田　滉

福島県立医科大学医学部同窓会報「光が丘」第三十四号に掲載された北尾　健先生のエッセイに感銘をうけました。その一部を紹介しながら、些か思うところを書いてみます。

林業を営む人は、百年先を考えて、木を植えるといいます。その事を子孫達は、恩として、後にじっくり実感いたします。恩とは、恩を施す人と恩を受け取る人が、共に清浄なものがあって、初めて知ることが出来るものだと述べております。父母や天地の自然の恵みへの感謝を自覚できることが恩を感ずることなのでしょう。純粋な心、慈しむ心、この二つのものが重なって恩という一文字が形成されているのでしょうね。　筆者は更に、「四恩」即ち、仏の恩、父母の恩、天地の恩、衆生の恩があり、その中で「仏の恩」が最も大切なもので、「恩とは仏教の根源であり、忘れてはならないものである。恩を知るは大慈のもと」と述べております。大慈が露れればきっと、素晴しい世の中になることでしょうね。また、目には見えない仏心に「お」と「さま」をつけて「おかげさま」と呼んでご恩を受け取る事ができる。仏心こそ恩の基本であると述べて話を結んでおります。

考えてみると、この世の中に生きているすべての人が、多くの方々から恩をうけて成長しているわけであります。果たして私たちは、受けた恩をどれほど理解しているでしょうか。余り考えず、感謝せずに過ごしているのではないでしょうか。ただ、恩を受けると同時に、知らず知らずのうちに、他者に恩を与えているのも事実です。筆者は、「その与えた恩を忘れても、受けた恩を決して忘れてはならない」と語っております。

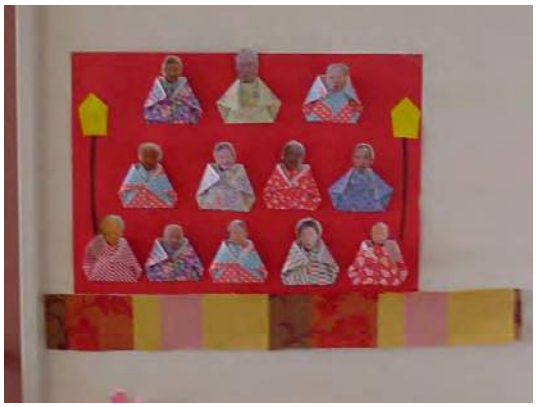
「望洋荘」に勤務して福祉活動に携わる皆さんは、この職場で、人に誇れるすばらしい仕事に従事しているのです。医療、保健、福祉活動に努力している人たちが敬愛されているのは、それぞれの立場で、心身共に悩む方々を心から支援しているからなのです。どうぞ、恩着せがましい態度や恩の押し売りの態度などをお取りになりませんようお願いいたします。皆さんの温かい心遣いには、望洋荘に住む方々やご家族の皆さんが感謝の気持ちをお持ちの筈ですから。

恩を、お互いに「ありがとう」という感謝の気持ちで、受けて忘れず、与えて忘れるものでありたいものですね。

『ひな祭り』雛人形を飾りました。

今年も事務所のカウンターに『雛人形』を飾りました。（写真上）望洋荘の入居者様の八割は女性であり、飾った翌日に女性入居者様の一人がお雛様の前で三十分ぐらいずっと眺めて居られました。雛人形を飾る事で、入居者様が春を感じてくだされば良いなと思っています。

薄磯海岸通りユニットでは、入居者様の顔写真を使い、オリジナルでお雛様を作成しております。（写真下）



お内裏様が二人、三人官女は四人とちょっと変ですが、その辺は何卒ご了承ください。

『節分』豆まきの風景

二月三日（木）の節分の日に、今年の年女（大正十年生まれの八十四歳）四名の入居者様に各ユニット・事務所をまわり、豆まきをして戴きました。施設長・副事務長ふんする鬼を元気よく追い払い今年一年のお払いを致しました。

最初に塩屋岬ホールの神棚の前でお祈りして、薄磯・四倉・勿来・事務所・永崎・豊間・塩屋崎ユニットの順に豆まきをして戴きました。施設長ふんする赤鬼（実には似合っていました）に大きな声で『鬼は外・福は内』と豆を投げつけるとみんなから大声援と笑い声がかかり楽しい雰囲気でした。

第九十一回　いわき寄席

平成十七年三月三日（木）
いわき市文化センターにて開催いたしました。

金原亭　馬生 師匠独演会

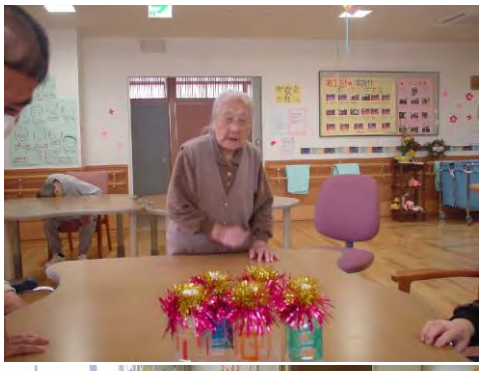
金原亭　馬生
（きんげんてい　ばしょう）

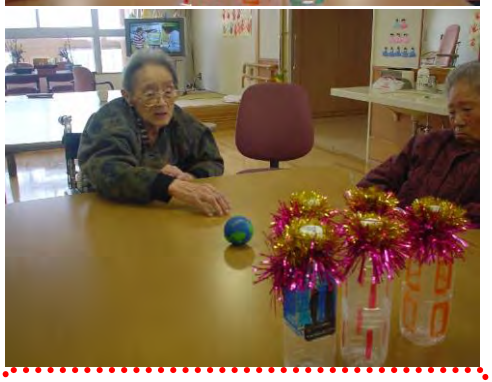
本　　名　佐竹　守
出 身 地　東京都中央区銀座
芸　　歴
昭和 44 年 3 月十代目金原亭馬生に入門前座名「小駒」
昭和 53 年　二ツ目昇進 「馬治」と改名
昭和 61 年　日刊飛切努力賞　受賞
昭和 62 年　真打昇進
昭和 62 年　スポニチ若手演芸大賞　受賞
昭和 62 年　国立演芸場花形演芸大賞　受賞
平成 11 年　十一代目金原亭馬生を襲名
平成 12 年　浅草芸能大賞奨励賞　受賞
趣　　味　歌舞伎観劇・川柳・NBA バスケット
自己PR　明るく上品な江戸前の芸風、馬生の名に恥じぬよう、芸道精進いたします。

―笑う門には福来るといいます。
笑いは家族円満―

今回も多数の方にお越し頂き盛大に執り行う事が出来ました。ご来場の皆さん、ひな祭りのゆうべを「いわき寄席」で、楽しまれていた様です。

『薄磯ボーリング大会』





薄磯海岸通りボーリングを二月二十八日に実施しました。
入居者様方、大いに楽しんで頂けました。特に上の写真は、施設の最高齢者（今年五月で百歳の方と九月で九十九歳の方）でありますが、とっても元気にプレイしています。

理事長の著作集より　その⑯

いわき寄席　其の二

落語あれこれ

須田　滉

コンコンチキチキテレツクテン。出囃子にのって噺家が舞台に登場。拍手のなか深々とお辞儀をし、すうっと顔をあげながら、「毎度馬鹿々々しいお笑いを一席、お付き合いの程をお願いいたします。本日はお医者さんが沢山いらっしゃるようで、消毒液の匂いやら菌いやいや金の匂いが馥郁と香ってまいります」などと枕噺に笑っているうちに、何時の間にやら本題(ストーリー)に突入。巧みな話術と筋立てに聞き入っているうち、ストンと落ち(下げ)に帰着し、拍手の中、舞台を降りる。森羅万象を一人で披瀝するという点、他の話芸とは些か異なる独特のものと言えましょう。

題材の多くは、江戸・明治時代の庶民の日常生活の中から採られております。分別のある大人がこんな事をしてはいけない、あんな事を考えてはいけない、と思いつつ、馬鹿々々しいことをやってしまう。頭では、わかりつつも実際の行動が伴わない。所謂、人間の「業(カルマ)」を、八っあん、熊さん、横町のご隠居さんに語らしているわけです。従って、表舞台の美談や立身出世、建前論は敬遠され、本音で暮らす裏長屋の庶民の義理、人情にポイントが置かれます。ストーリー、会話には非合理的な面も多々あり、真面目人間には、若干腹立だしい思いもありましょうが、落語が「人間の業の肯定を前提とする一人芸」であると言われる一端をご理解頂けるものと思います。

翻って、私ども医者を考えて見ると、落語家と非常に共通点があると思います。医療という舞台に白衣を纏って登場。聴診器を片手に患者、時には家族とお喋りの開始。枕噺には天気、景気、元気(といきたいのですが、これが無いから来院。まれに過ぎたるための御来駕もあり。)、商売、家族等々について。この枕が、極めて重要なことなのですが、時には、混んでいると省略。(くさしの医者は自然淘汰が目前に。) さてさて、本題へ、問診をしながら診察、場合によっては検査等をと相手の状況に応じて展開。最終的には、今後の方針を含めて診断が下される。落語で言うところの落ちになりましょうか。この落語の落ちは、それぞれの噺しの違いにより、考え落ち、逆さ落ち、仕草落ち、地口落ち、仕込み落ち、とたん落ち、梯子落ち、離れ落ち、拍子落ち、ぶっつけ落ち、間抜け落ち、回り落ち、見立て落ち等々に分類されるようであります。さあ、私共はさしずめ何落ちになるのでしょうか。

日々の臨床の場で、我々は絶えず的確な落ちが要求されて居るわけです。難病の確定診断、大手術の成功、救急時の無事回復などの折りには、思わず声高になり、且つ誇らしげな顔で身振り手振りも大きくなるようです。しかし、手を尽くしても病状じり貧、癌の告知、癌再発、等々の説明には青息吐息。噺家でも手を拱くところを何とか切り抜けるのであります。大処は何といっても、ご臨終の宣告でありましょうか。場数を踏み、自分自身も目頭が熱くなるほどの対応が出来れば、落語の世界の真打(師匠)の域でありましょう。落語家がこの域に達するには、見習い前座、前座、二つ目(舞台で羽織りが許される)、そして苦労に苦労を重ねて真打になるのであります。医者とて同じこと。尊敬する先達に多くの指導を受け、日夜悶々としてどのような落ちが患者さんに適切なのかと悩むのであります。それでも、なかなか名医といわれる真打への道は遠いのであります。

かように我々も苦労をしているのですが、今様の医師殿はコロコロ変わる医療行政により、熱い鉄板の上に放り出された猫のようなものです。ヒーフー言いながらピョンコラピョンコラ飛び回っているのです。噺家諸君、弄くり蒟蒻にされている我々の様態をネタに新作落語でもお創りなさっては如何でしょうか。きっと面白いものが出来ること請け合いです。まあまあ、愚痴っても詮無いこと。今晩は蒟蒻をおでんのタネにして一献傾けますか。うちの愚(虞美人と間違いなされぬよう、念の為)のお酌にて。

話　…口をついて出る言葉(挨拶、駄洒落)
噺　…口から出ずる新しい言葉(創作、情報)
枕噺…本題に入る前に演じられる噺
落ち…噺の終結、下げとも

(平成元年「いわき市医師会報」への寄稿文から
現在「いわき寄席」九十一回になっています。)

介護老人福祉施設『望洋荘』職員紹介⑯&コメント集

介護士　矢吹　淳

右も左も分からず介護の仕事を始めてから、半年が経ちました。まだまだ分からない事ばかりで人生の先輩方に迷惑を掛けてばかりだと思いますが、早く皆様に信頼されるスタッフになりたいと思います。

これからも「明るく、やさしく、元気良く」をモットーに利用者様が安心して楽しく過ごす事の出来る環境を作り、元気をいっぱい与えられる様に努力して行きたいと思います。これからもよろしくお願いします。

介護士　広瀬　美香

この職業は、私にとって初めてで今は毎日が勉強の日々です。元気で、仲良く、優しくて、いつも笑顔の絶えない利用者の方々・職員に囲まれ楽しく仕事をしています。これからも様々な事を学び利用者の皆様が、充実した楽しい生活が送れるよう頑張って行きたいです。

今月の言葉その⑭（倫理研究所編標語集から）

多言よりまごころの一言を

おしゃべりに悪い人はいないが、どうやら独り善がりな人が多いようだ。そこで提案、言いたいことをちょっと横において、ちゃんと聞くことから始めてはいかが？

『望洋荘』に住んでみて　第三話

『望洋荘』の各部門の内部の紹介をします。今月は「四倉・新舞子海岸通り」です。

居室部門（ユニット）　四倉・新舞子海岸通り一丁目には一、二、三、五番地の四つの居室があり、ほかにホールを中心にして、他に二、三、五丁目と命名された居住地区があります。ここには十六名の方々が支援する職員とともに住んでいる共同体です。

四倉・新舞子海岸通りへは、正面玄関を入り直ぐ右へ曲がり奥のエレベーターの前を通ってすぐ左側にあります。

ユニットに入ると入口には左側に入居者様の写真が飾られており、その先にある掲示板には今日の日付が大きく貼り付けています。毎日、夜勤者が午前十二時になると張り替えています。更にホールを通りディルームに進みますと、太平洋が一望できます。三丁目・五丁目からも眺める事が出来ます。一丁目・二丁目からは中庭が眺められます。向側に勿来海岸通りユニットがあり、入居者様同士での交流もあります。

利用者数は、十六名で最高年齢九十二歳　最小年齢七十七歳　平均八十一歳です。

利用者の皆さんは、一人一人個性が高く、自己主張をはっきりと持っています。リハビリ運動などを行うと大きな声で一生懸命体を動かします。また歌・縫い物が好きな方、寂しがり屋の方、進んで仕事を探し手伝って下さる方などが居られ、全体的には、みなさん穏やかで、優しく、笑顔が絶えない方々です。

好きなテレビ番組は、お相撲がとても人気があり、場所が始まるとテレビに釘付けです。入居者同士の会話の中にお相撲の話が出るくらいです。

これからの四倉・新舞子海岸通りユニットは、皆様が落ち着いて生活出来る様な穏やかな雰囲気作りを入居者様と一緒に協力し合い作って行きたいと思っております。

昨年１１月に四倉ユニットの入所者様と『いわき市石炭化石館』に行った時の集合写真です。土地柄常磐炭鉱で働いていた方もおり、館内ではガイドさんとして本領発揮されていました。当時の様子をそのまま再現されたすばらしい建物でした。

編集後記
『望　洋　荘』便り
平成十七年三月一日発行
発行所　いわき市
平豊間字合磯三十九番地
社会福祉法人　りんさく福祉会
介護老人福祉施設　望洋荘
電　話　（０２４６）５５－７３７３
ＦＡＸ　（０２４６）５５－７２５５